

〈基調論文〉

アクティブ・ラーニングからディープ・ラーニングへ － 生活科の指導からのディープ・ラーニング実現の教育方法の考察 －

加藤 明*¹

1. アクティブ・ラーニングとは何か

アクティブ・ラーニングとは、1990年代初頭アメリカ合衆国において大学の教授法の改革として提唱された学習論であり、「聴く」という受動的な講義型の授業から脱却し、「話す・書く・発表する」といった活動を取り入れた授業によって、能動的、主体的な学習の成立をめざすものである。これまでの講義型に対し、このようなアクティブ・ラーニング型の授業の形態を取り入れる背景には、講義型の授業にはついて来れず学習の成果が上がらないという学生の実態があるのであり、これは現代の我が国の大学にもおいても同様であり、文部科学省中央教育審議会は2012年に『大学教育の質的変換に向けて』と題して次のような答申を出し、大学においてアクティブ・ラーニング型の授業を取り入れることを奨励した。

答申では、アクティブ・ラーニングを教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習方法の総称と定義し、学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験も含めた汎用的能力の育成を図るものであり、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等だけでなく、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニ

ングの方法とされた。①

この答申の大学教育におけるアクティブ・ラーニングを、次期学習指導要領において初等中等教育に導入することについて文部科学大臣から中央教育審議会に諮問がなされ、これを機にアクティブ・ラーニングが初等中等教育において議論され、これを取り入れた教育実践が活発に行われることになった。②

つまり、アクティブ・ラーニングにはこれといった定型があるのではなく、PBL (problem based learning, project based learning) や反転学習、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等々の主体的、能動的に知識・技能を活用して問題解決に取り組む中で汎用的な諸能力を考慮して育成する学習の総称といえる。

アメリカ合衆国ではアクティブ・ラーニングといえれば自主的協同学習であるPBLをさすことが多いのであるが(PBLでは内容及び能力を系統的に育成することは難しい)、我が国の学校教育では「総合的な学習」や「生活科」の学習が学習形態としてはこれに近いと考えられる。ただ、「総合的な学習」や「生活科」の学習が、前述したアクティブ・ラーニング型活動を取り入れた学習がめざすべきとされる汎用的能力を育成するものであるかどうかは、おおいに疑問の残るところである。「総合的な学習」にしる、「生活科」の学習にしる、それぞれの教科内容に即して育成すべき能力が導き出され、その実現をめざして指導が展開されるのであるが、目標としての能力の育成が課題であり、しかもそ

2017年9月19日受理

*¹ Akira KATOU

関西福祉大学

れを系統的な見通しのもとに育成することもまた課題であるからである。汎用的能力の第一は言語力であるが、これを生活科や総合的な学習だけでなく、全教育活動を通して有機的な計画のもとにどう育成するか、大学における教養教育として、初等中等教育における教養教育の基盤として明確に位置づけ、意図的、計画的、系統的に育成することを怠ってはならないと考えられる。さらに、大学教育の改革の方法としてのアクティブ・ラーニングを、初等中等教育に導入するにあたっては、校種なり、教科、領域なりの固有性、独自性に十分配慮して後のことであるべきであり、この後、学習指導要領の基本的な考え方として導入されたディープ・ラーニングは、このようなアクティブ・ラーニングを補い、真に教育的なものにするために機能することをねらって導入されたものと位置づけられる。

2. ディープ・ラーニングとは何か

アクティブ・ラーニングとは、前述したように、1990年代初頭にアメリカ合衆国において大学の教授法の改革として提唱された学習論である。この学習論について、Bonwellは、その著『Active Learning』（1991）において、次の5つをもってその定義としている。

- ①学生は授業を聴く以上の関わりをしていること。
- ②情報の伝達よりスキルの育成に重きが置かれていること。
- ③高次の思考（分析、総合、評価）に関わっていること。
- ④活動（読む、議論する、書くなど）に関与していること。
- ⑤自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること。

これらのうちの①④がアクティブ・ラーニング型の授業、形態として流布しているところで

あり、②④⑤がその目指すところを表すものといえる。特に③及び⑤は、ディープ・ラーニングの内実を構成するものでもあり、次期学習指導要領では「主体的・対話的な深い学び」（アクティブ・ラーニング）と表現されているものに該当するものである。ここでの「主体的」「対話的」とは、手段、方法概念にとどまらず、目的概念でもある。つまり、おもしろそうだ、やってみたいと「自発的」に始まった学習が、展開するに連れて「ますますおもしろくなってきた」（または、だんだんおもしろくなってきた）といった学ぶ手応えとともに、見方、考え方やスキルが身につく、課題を自分自身の課題として自覚化し、自分自身の判断や選択で学習に取り組むことが「主体的」であり、これをめざして指導が展開されるのであり、これは目的概念として位置づくものである。さらに、このような学習のプロセスで、学習者相互の意見交換等のコミュニケーション及び知的コラボレーションの活動によって対話的に学ぶこと、これに書物等からの知見、情報を効果的に組み合わせることによって対話的に学ぶ手応えを味わわせ、そのような能力を育成することが目的としてめざすべきものであり、以上のような主体的で対話的によって「深い学び」の成立をめざすこと。これがアクティブ・ラーニングをディープ・ラーニングにすることであり、このような学習のプロセスから得られる成果を振り返ることによって「⑤ 自分自身の態度や価値観の探求」へと導くことになる。「③ 高次の思考（分析、総合、評価）に関わっていること。」について、これはブルームの教育目標のタキソノミーから導き出されたものであるが、認知領域の知識、理解、応用のさらに上位に位置づく目標であり、個別なものに関する知識や、関係性や法則性の知識の習得、活用をねらいとする初等・中等教育の現状からは、現段階では高すぎる目標であり、これは大学教育の課題と位置づけておくべきも

のと考えられる。③

ディープ・ラーニングについては、産業界ではAIが行う不断の再オーガナイズ化によって認識及び処理能力を高めていく学習とされているが、学校教育における次期学習指導要領においては、新しい時代に求められる資質・能力の育成のなかに示された「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」から考えて、AI的な不断に向上する認識能力、処理能力のための関連付けと再構造化の能力を備えた学びだけでなく、AIを超える人間的な成長のための振り返りによる不断の自己探求、自己変革、成長の能力を兼ね備えた学びの力の実現をめざすものといえる。このどちらにも不可欠の能力は、メタ認知の能力であり、社会の中でのより望ましい自己実現をめざす求道的な人間が育つことをめざすものと考えられる。

3. 生活科の指導からの考察－アクティブ・ラーニングからディープ・ラーニングへ

話す、書く、発表する等々の活動を取り入れたアクティブ・ラーニング型の授業によって、学習活動を活性化し、自分ごととして問題解決や課題を受け止める学習の奨励は、大学教育を始めとする高等教育の現状打破から生じた要求である。この要求は大学から高等学校、そして中学校へと展開されるべきものであり、小学校教育においてはアクティブ・ラーニング型の学習活動を軸に展開される場合が多く、アクティブ・ラーニング型の強調より、アクティブ・ラーニング型と講義型を有機的に結合してより効果的な指導を展開するかが課題である。

小学校教育における、このようなアクティブ・ラーニング型の学習の代表は、生活科の学習である。なぜなら生活科は、活動や体験を軸に学習を展開することによって、実感、納得、本音に基づいた理解を積み上げることがめざす教科であるからである。④

しかしながら、活動、体験を軸に学習活動が展開される一方で、交流の場面における教師の指導性や活動の方向性の示唆、共有化すべき気づきの顕在化等が効果的に行われなければアクティブ・ラーニングが真に効果のあるものにはなり得ない。これは講義型とアクティブ・ラーニング型を有機的に組み合わせる指導によって成立するものであり、ディープ・ラーニングの成立の条件でもある。

1年生活科の「家族単元」において「お母さんの仕事」という授業を参観したことがある。現行の学習指導要領では「2 内容（2）家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。」に該当する単元の活動である。

参観した授業では、「お母さんの仕事にはどんなものがあるかな。」といった教師の発問から始まった。「お洗濯」「お掃除」「ご飯の用意と洗い物などの後片付け」「ペットの世話」「お布団の用意」「お風呂掃除」「買い物」等々、次から次へと発表が続き、お母さんの仕事が黒板一面に書かれた。そして改めてこれを見渡した子どもたちからは「お母さんはたいへんだな」のつぶやきとともに「私はときどきお風呂掃除を手伝っているよ」の声が上がり、手伝っている仕事や、手伝えそうな仕事の発表へと展開していった。「それでは、これからもどんどんお手伝いをして、また発表しようね」の教師の言葉が締めくくりとなって授業が終了した。

さてこの授業は、アクティブ・ラーニングからみて、またディープ・ラーニングからみてどうであろうか。

「主体的、能動的で自分事として学習に取り組む」、これをアクティブ・ラーニングの定義とするなら、この授業はアクティブ・ラーニングから見て合格点である。しかしながら、これ

からも自分の判断、選択から「家族の一員として役割を果たしていこう」とする真の主体性や、納得や実感に基づく手応えのもとに「お母さんの仕事」についての認識が変わり、友達の家族との違い（例えば、おばあちゃんやお父さんが家事をしている）から自分の家を振り返っての新しい認識、さらに自分が積極的に家族の一員としての役割を果たしてきたかといった自問自答から導き出されるこれからの自分の在り方といったディープ・ラーニング（深い学習）の成立から考えると、もっと効果的な展開が考えられるはずである。

例えば、休日に朝から夜までお母さんと一緒に一日中家事を行い、それをもとに前述のような展開で授業をしてはどうであろうか。当然、できる仕事とできない仕事の判別もでき、いかに支えられているかが分かるだけでなく、友達の家族との違い、それぞれの家庭の状況の違いの理解と相まって「お母さんの仕事はたいへんだ。でも休むわけにはいかないんだ」といったことが実感、納得を伴って理解することができる。これまでの認識が覆され、新しい認識構造に変わるだけでなく、自分自身の在り方も見つめ直すことができる。これこそがディープ・ラーニングではないだろうか。

このようにディープ・ラーニングへの展開を見通しての方向付けや、気づきの共有化と独自性の認識、これは講義型の授業における教師の指導性と同じものであり、これがあってこそアクティブ・ラーニングからディープ・ラーニングへと深めることができるのである。このような展開を各教科、各領域等々でどのように実現すればよいのか。さらに、各教科の内容に即した「見方・考え方」だけでなく、もっと広い社会や自分自身に対する見方・考え方のあるべき姿とその実現の方法、そしてそれらと合いまっの資質・能力とはどのようなもので、それを育成するための授業の在り方等がディープ・

ラーニングを進める学習主体育成のために探究、解決すべき急務の課題である。

引用・参考文献

- ①『新たな未来を気づくための大学教育の質的変換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－』（中央教育審議会答申 2012年 8月 28日）
- ②『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』（文部科学大臣から中央教育審議会への諮問 2014年 11月）
- ③『実践教育評価事典』2004、『改訂実践教育評価事典』2010、梶田毅一、加藤明編著
文溪堂
- ④『「開く」授業の創造による授業改革からカリキュラム・マネジメントによる学校改革へ』加藤明著、
文溪堂、2016